児童の自己有用感を高める取組

実践例　　「人権意識の醸成と学力向上を軸に，児童相互のコミュニケーション能力を育成する，「学び合う」児童を目指して」

１．研究内容

（１）指導にあたって

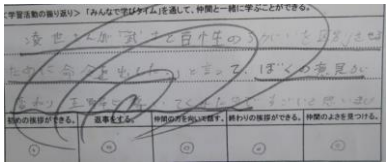
これまで，本校では人権感覚を身に付けた児童の育成を目指し，人権教育の推進に邁進してきた。その根底にあって，大切にしてきた言葉が「人へのまなざし」である。自分を大切にするように，他者を大切にすることで，自己有用感を育み，自尊心を高めようと試みてきた。しかし，「自分と仲間を大切にする児童」の姿や「人権意識」「正しい人権感覚の定着」は一定以上の水準で実現できている反面，「進んで行動できる児童」の具現に至っていない面があるように感じられた。また，学校生活において大部分を占める授業において，人権意識の醸成を図る場面が少ないことに気付いた。そこで，よりよい授業を求め，学力向上を図ることは，人権意識の醸成と無関係ではないこと，相関関係にあることを考え，主題研究に位置付けた。研究の切り口としては系統性がはっきりしている算数科に位置付けるが，どの教科においても「学び合う」児童の姿を求めていくことが児童相互のコミュニケーション能力の育成につながると考え，他教科においても実践を進めることとした。

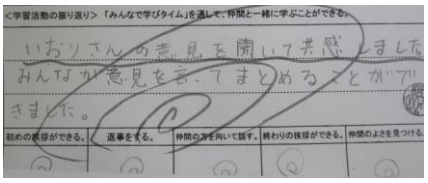
（２）留意点

「学び合う」という言葉は表面的にはグループ交流やペア交流のような話す場面を示すことが考えられる。しかし，その活動にどのような「思考」を意図するのかによって，児童の思考が活性化するかどうか，大きく違いがある。「学び合う」ためには，どの子も自分の考えを口に出せる土壌が必要である。また，聞き手も仲間の考えを受け止め，それを考えに加えつつ練り合う練習が必要である。算数科や社会科，理科のような課題から予想や見通しをもつ授業展開を考え，「一人で考えタイム」「みんなで学びタイム」と十分な時間を確保して話し合わせ，仲間の意見をまとめて発表することを基本的な授業展開とした。

（３）本校児童の実態

本校児童は，「仲間とともに」を合言葉に，学級や学年，異学年集団での遊び，挨拶や掃除のボランティアを通して，仲間意識を高め，よりよい人間関係をつくろうと努めている。授業でも，仲間とともに学習しようとする姿が大切にされてきた。自分の考えを進んで話そうとする姿勢に弱さがあるものの，学級集団の凝集度が高まるにつれ，「息の長い発言」や「仲間とつなげた発言」が見られるようになった。一方で，挙手発言が進んでできる児童はそんなに多くいるわけではない。これは，間違った答えを言うかもしれないということへのためらいや，自分が発言しなくても誰かが言うだろうという他力本願な意識が内在するからであると考えられる。また，仲間関係を形成する中で，和を乱すかもしれないという意識が見られる。こうした児童にはなかなか自己肯定感や自己有用感が生まれにくく，人権意識を扱ったアンケートにおいても，「人の役に立ちたい」と考えていても，なかなか行動に移せない実態に表れていると考えられる。



（４）実践を進めて

「自分で考えタイム」「みんなで学びタイム」と名付けた，授業時間における活動を通して，課題解決に向けての児童同士の話し合いは回数を重ねるごとに自然発生的に行われるようになり，特別な活動という抵抗感もなく，取り入れられている。児童は自分のノートに書かれている図表等を指示しながら説明をしたり，仲間のノートをのぞき込みながら話を聞いたりすることが自然にできるようになった。今後は，話し合うための課題の難易度をどの程度まで設定するかがカギとなると考えている。不完全な答えであっても，児童相互の話し合いの中で，よりよい解答を生み出すことを大切なプロセスとして設けていくことで，学力向上と人権意識の醸成に結び付くと考えるからである。